

Title	K <sub>2</sub> CuCl <sub>4</sub> · 2H <sub>2</sub> O及びK <sub>2</sub> CuCl <sub>4</sub> · 2D <sub>2</sub> Oに於ける交換相互作用の異常な温度依存性
Author(s)	奥田, 高士
Citation	大阪大学, 1969, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/29724">https://hdl.handle.net/11094/29724</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【 8 】

氏名・(本籍)	奥田高士
学位の種類	理学博士
学位記番号	第 1605 号
学位授与の日付	昭和 44 年 3 月 28 日
学位授与の要件	理学研究科物理学専攻 学位規則第 5 条第 1 項該当
学位論文題目	<b>K<sub>2</sub>CuCl<sub>4</sub> · 2H<sub>2</sub>O 及び K<sub>2</sub>CuCl<sub>4</sub> · 2D<sub>2</sub>O に於ける交換相互作用の異常な温度依存性</b>
論文審査委員	(主査) 教授 伊達 宗行 (副査) 教授 川村 肇 教授 金森順次郎 教授 国富 信彦 助教授 立木 昌

論 文 内 容 の 要 旨

K<sub>2</sub>CuCl<sub>4</sub>·2H<sub>2</sub>O 及び K<sub>2</sub>CuCl<sub>4</sub>·2D<sub>2</sub>O 中の異種の Cu<sup>2+</sup> ions 間の交換相互作用を常磁性共鳴の方法によって調べた。測定は 9.3~65.8GHz の周波数域で行い、実験温度は Solid H<sub>2</sub> temp. と 370°K との間である。lig.N<sub>2</sub> temp. 以下では全周波数域で、唯一つの吸収線が観測されたが、それらは高温で二本の線に分裂した。実験結果は、異種の Cu<sup>2+</sup> ions 間の交換相互作用が異常に大きな温度依存性を示すと仮定して説明された。交換相互作用の大きさは、K<sub>2</sub>CuCl<sub>4</sub>·2H<sub>2</sub>O においては、J/k(°K)=0.07 (305°K); 0.10(285°K); 0.14(248°K) であると評価された。同様な効果が K<sub>2</sub>CuCl<sub>4</sub>·2D<sub>2</sub>O においても見られた。K<sub>2</sub>CuCl<sub>4</sub>·2D<sub>2</sub>O 中の交換相互作用の大きさは、K<sub>2</sub>CuCl<sub>4</sub>·2H<sub>2</sub>O 中のそれよりも約 0.02°K だけ大きいことが分った。

論 文 の 審 査 結 果 の 要 旨

普通、磁性体の諸問題を論ずるに当って交換（あるいは超交換）相互作用は温度によらない、とするのが常である。事実過去において交換相互作用の温度係数は測定不能なほど小さいことが知られている。奥田君はこのような常識に反していちぢるしい温度変化を示す交換相互作用が K<sub>2</sub>CuCl<sub>4</sub>·2H<sub>2</sub>O, および K<sub>2</sub>CuCl<sub>4</sub>·2D<sub>2</sub>O に存在することを発見した。

これらの物質は 1°K に前後において強磁性転移点をもつという点で他の Cu<sup>2+</sup> 化合物がほとんど反強磁性を示すこととちがっており、結晶構造も比較的簡単なのでその磁性はかなり以前から調べられて来た。しかし極低温における各種のデータの解析結果と、室温付近で求められた結果とはかなりのくいちがいのあることが明かとなっており、何らかの新しい考え方が必要とされていた。

奥田君は、これらの結晶に存在する2種の磁氣的に等価でない  $\text{Cu}^{2+}$  スピンが存在することに注目し、互にことなつた g-値のために生ずるゼーマンエネルギーの差が、このスピン間の交換相互作用とくらべて大きいか小さいかにより電子スピン共鳴に変化が現れることを応用して交換相互作用の大きさを波長 3 cm から 6 mm までの各種マイクロ波を用い、極低温から 370°K までの温度領域で測定した。その結果、今までの常識に反して交換相互作用の大きさが低温から高温に至る間に約 1 桁も変化しているという事実を見出した。

たとえば  $\text{K}_2\text{CuCl}_4 \cdot 2\text{H}_2\text{O}$  では低温で  $J/k=0.3^\circ\text{K}$  と求められるのに反し、室温以上では  $0.03^\circ\text{K}$  程度にまで小さくなっている。この原因については現在の所わからない。しかし交換相互作用の研究に対して今後一つの重要なヒントを与えるものであり、大へんめずらしい事実を見出したものとして理学博士の学位論文として十分価値あるものと認められる。なお重水化物ではごくわずかに交換相互作用が大きくなっていることをつきとめている。